

「物語欲求」が生み出す歴史とネーション ーグリム童話が創作したものー

相澤 啓 一

1. 「物語欲求」

人には残念ながら、生まれながらにして与えられている自明の意味や所与の根拠は存在しない。もちろん誰も、自らの存在に何がしかの意味があると思いたい。そこで人は、「何のために生きているのか」という問いに答えるため、そして自らの存在や行動を正当化するため、さらには死への不安を払拭するために、さまざまな物語を必要としている。これを「物語欲求」と名づけることとしよう。われわれ一人ひとりが、そしてさまざまな社会集団が、何らかの形で多かれ少なかれそうした「物語欲求」を抱えている。

自らの存在を意味づけ、また共同体の中で安心して暮らせるために、人類の歴史の中でさまざまな物語が生み出されてきた。その代表的な物語が宗教である。極楽浄土の物語、イエス・キリストの物語、あるいは死後の救済の物語を、信者たちは「物語」としてではなく「真理そのもの」として受け入れ、信じてきた。自分たちが神によって作られているという物語の内部にいる限り、神を作っているのが実は自分たちの物語それ自身であることには気づかない。

そうした物語は、往々にして他者が抱えている別の物語と抵触し、物語相互の間に戦いを引き起こす。共同幻想を抱く集団の強化を目指して他者に対する攻撃を厭わない物語も少なくないからである。その中には、共同体とともに消滅した物語も無数にあったことだろうし、啓蒙によって否定されてきた物語も数知れない。他方で今もなお、日々新たな物語が生み出され続けている。

自ら信奉する物語を守るべく、人はときに戦うことを厭わない。それは「物語の戦い」でもある。むろん実際に戦って血を流すのは物語の奴隷となった人間たちであるのだが、「国体を守る」とか「悪の枢軸を叩く」といった物語に基づく戦争は「物語の戦い」でもあるのであって、勝利した物語だけが公式の歴史となって残ってゆく。聖地をめぐる戦争、自爆テロなど、日々の報道で伝えられる事件の数々は、「物語欲求」の呪縛が自らの存在の破壊をすら容認し、

いかなる惨劇をも厭わないほどに強固であり得ることを示している。他方で、権力と資金を持つ側は、メディアを総動員して自らに都合のよい物語の正当性を全世界に向けて主張する。広告代理店を使った情報操作によって作り上げられる数々の小さな物語が、「自由と民主主義を守る」などという大きな物語を振りかざした戦いの勝利を目指して発信され続けているのである。

「物語」と聞くと、多くの人はず先文学としての物語を思い浮かべることだろう。神話や童話、今昔物語とか千一夜物語など文字通りの「物語」のみならず、近代になって大量に書かれてきた小説もまた、それぞれが完結した物語である。作家たちはフィクション、即ち虚構の創作物語を大量に生産してきているし、そうした作品を対象に研究を行ってきたのが19世紀に成立した文学研究である。しかし物語が「始まり－中間－終わりへと分節化され、プロットによって支えられた、特定の出来事を報告する複数の文章によって構成される」¹と定義されるならば、物語はひとり文学作品には限ったものではない。むしろ、冒頭に述べたような、自己や世界を認識する際に不可避免的に登場する物語欲求を基本モデルと考えるなら、現実から一定の距離を置いた地点に独立した物語世界を作り上げるというフィクション文学としての（狭義の）物語は、本来の広義の物語から外化されて独自の発展をとげた特殊ジャンルであると位置づけられよう。それを示すように、近年の物語論は文学研究にも増してとりわけ歴史学周辺で大きく議論が進んでいる²。とはいえ、物語をめぐる言説において文学が果たす役割を改めて位置づけ直し、現在の社会や歴史が盛んに作り出している物語を文学研究の立場から分析することによって、物語をめぐる議論に新たな貢献を行なうことも可能であろう。

本稿は、「物語欲求」をキーワードに、さまざまな言説を物語として分析するときに歴史やナショナリズムに関していかなる知見が得られるかを確認し、個々の物語が内包する問題性を分析する試みである。具体的な分析事例としてはグリム童話を取り扱う。グリム兄弟における「物語欲求」と19世紀ドイツにおける「ネーション欲求」、「歴史欲求」との相関性からは、物語に媒介されるネーションと歴史の相互依存関係が浮かび上がることであろう。

2. 「物語欲求」の産物としてのネーション

現在の世界秩序を構成するのは国家である。そして国家の存立基準として長らく機能してきたのが「民族自決」の原理、即ち、国家という「政治的単位」

とネーションという「民族的単位」とが「一致しなければならない」³とするナショナリズムの原則であった。しかし、この国家を基礎づけるはずのネーションとはいったい何であるのか、これを定義づける試みは成功したためしがない。もし、例えば仮にDNA鑑定等によって検査可能な「日本人遺伝子」のような客観的基準に基づいてネーション帰属性が規定されるといったことが可能であるなら、各国家が存在することの客観的な根拠が確立することとなる。そうなれば世界は現在とはどれほど違ったものとなるであろうか。しかし現実には、ネーションを定義するために持ち出されてくるさまざまな基準、例えば、言語、血、エスニシティ、領土、共通の歴史、文化的特性といったカテゴリーは、いずれも「不明瞭で、変化しやすく、曖昧なもの」⁴でしかない。近年のナショナリズム研究を決定的に推し進めたホブズボームは、ネーションであるための客観的基準を確立しようとする試みがすべてどれもうまくいかない理由として、そうした定義が或る程度あてはまる集団は存在するにしても「常に例外が見出される」からであり、「定義に当てはまっても明らかにネーションではない」ケース、また逆に「疑いなくネーションであるのに基準あるいは基準の組み合わせに当てはまらない」ケースが続出する点を挙げている⁵。アプリオリな客観的定義に替わりうるものとして主観的定義も試みられてきているものの、ホブズボームによれば、「ネーションに所属しているという成員の意識によってネーションを定義する」という「同語反復」は極端な主意主義に導きかねない。かくして、ホブズボームのナショナリズム研究の出発点は、次のようなものとなる——「ネーション研究を志す者が最初に取るべき最良の態度は不可知論であり、ネーションの構成要因に関するアプリオリな定義を一切想定しない。」⁶ かくも曖昧なネーションを根拠として世界の多くの国家が構成されているという驚くべき事態が、さまざまな紛争の一つの要因となっていることは、改めて言うまでもないだろう。

ネーションが想像の産物であり、ネーションを客観的に定義することが困難を極めるという認識は、1980年代前後から急速に発展したナショナリズム研究において、(多くの人の日常感覚とは未だ相容れることのない) 共通の学的前提となっている。ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』やホブズボームらの『創られた伝統』などを受けて、日本国内でも、さまざまな文化伝統と呼ばれる具体例をあげてその構築性を検証する作業が行われてきている。明治維新という近代化プロセスの中で、例えば古事記や日本画が、それどころか天皇制や日本語、また単一民族起源論といった国家を支えてきた基本的言説

そのものが、いかなる創作的構築を経て新たに誕生し、あたかも日本古来の伝統であるかのように語られてきたものであるかが、次々と検証されてきたのである。

ネーションを実体として定義する試みは確かに破綻している。しかし留意しておきたいのは、これがネーションを対象とする学術的議論の破綻を意味するのではなく、ネーションに依拠してきた18世紀以来のナショナリズムの論理的破綻を示しているに過ぎないということである。その意味で、学術研究にとっては、まさに実体的意味を伴わない概念としてのネーションを何らかの形で定義づけておくことは、今後の議論にとってやはりどうしても必要であろう。その意味で本論文では、ネーションを「物語」として定義する試みを行なってみたい。

ネーションは単に「想像の産物」であり「虚構」であるだけでなく、信奉者にとって魅力的な「物語」でもある。即ちネーションとは、ネーションという実体があたかも存在するかのように語られるさまざまなフィクションに描かれた物語の集積なのである。そのときどきに必要な文脈に合わせて語られるネーションという物語には、相矛盾する多様な要素が含まれており、そうした多様性を包含したまま、現実の国家に合わせてゆるやかな一つの大きな物語集合体を作りあげられている。しかもこの物語は、フィクションである⁷。（そう見るとき、ネーションの実体を客観的に定義できないのは当然である。）とはいえこの物語は、小説などとは異なり、自らをフィクションであるとは認めず、あくまでノンフィクションであると標榜する点に、大きな特徴を持っている。（その点で宗教の場合と共通している。）ネーションをあくまで何らかの自然実体であると信じる人が作り出す物語を、あくまでそれをノンフィクションとして受け取る人が実話として受け取る、という閉じた自己完結の論理が、ナショナリズムを成立させている⁸。従って、ネーションという物語にとっては外部の視点は基本的に存在しない。この物語の信奉者は、ネーションの語りの世界から外に出たり、外部の世界との異文化間コミュニケーションによって自己変革をしたりすることを感情的に嫌い、拒否する回路の中に棲んでいる。というのも、ネーションという内部完結型フィクションの中でインサイダーとして生きる限りにおいて、人は矛盾を感じることなく幸せに生きることができる（と思われる）からである。

ネーションという物語は、それを信ずる者に対し、自分の存在に意義を与えて欲しいとの「物語欲求」に正面から応えて大きな安心感を与えてくれる。そ

の意味で、ネーションという物語が、その信奉者にとっては何者にも代え難い大きな魅力があることを、はっきりと認めないわけにはいかない。むしろネーションという物語はときに犠牲者を（それも戦争になれば極めて大量に）生み出す。が、逆説的なことに、犠牲者の遺族たちこそは、この物語の最も熱心な信奉者となることが多い。というのも、この物語は、物語のために死んでいった犠牲者に対してとりわけ手厚く、然るべき栄誉ある場所（例えば「英霊」とか「靖国神社」）を物語内部に用意し、死を意味づけることによって悲しみにくれる遺族にとっての唯一の慰めとなる物語を提供し、遺族の物語欲求を充足させて、ますます結束を固めるという機能を持っているからである。このようにして、ネーションという物語は、信奉者にとって抗しがたい魅力を備えていると同時に、物語の真偽を疑う議論に対する感情的な拒否反応をさせるメカニズムもプログラムされている。だから、それを理性的に啓蒙しようという知的作業は困難を極めることとなる。日本でネーションの虚構性・構築性を指摘する議論が90年代以降盛んに行われてきたにもかかわらず、それが広く受け入れられるに至らない大きな限界は、以上見てきたような「物語欲求」の尋常ならざる強さのためであろう。ネーションという物語が、他のどんな物語にも増して物語欲求を見事に充足させているとするなら、単にこの物語の虚構性を指摘するだけでなく、もっと魅力的な物語を別の選択肢として用意するか、あるいは物語欲求そのものを停止させない限り、この物語は今後も生き続けるに違いない。

個人にとってのネーションの物語の存在意義は、多くの場合、「私」の存在を意味づけて支えてくれる「われわれ」という集団を現前化してくれることにある。従って、ネーションに描かれる「われわれ」の姿は、肯定的なステレオタイプ・イメージに満ちている。とはいえ、ネーションという物語は、そのネーションの個性的な実体を描くかに見えて、じつは、全人類に共通する肯定的価値を自分たちにだけ差し押さえようとする形で描くことが多い。例えばドイツでネーションの物語を強烈に唱えたフィヒテにとってのドイツ民族とは、「少なくとも自由の存在に気づき、自由を憎んだり恐れたりするのではなく自由を愛する人——このような人々はすべて始原的な人間であり、もし彼らを一つの民族としてみるならば、一つの始源的な民族、民族そのものである民族、即ちドイツ人なのです。」⁹といった形で描かれていた。ネーションの物語はこのように多くの場合、普遍的な価値のいくつかを「われわれグループ」に独自なものとして標榜し、差し押さえる形を取る。（「われわれ」集団以外の他者

に対する徹底的な無関心を前提とする思考様式である。)さらに、ネーションという物語はしばしば、自己の独自性・優位性を担保するために、文化的・美的な価値や歴史・伝統を引き合いに出すこととなる。それらを根拠にして、ネーションという物語は、他者を作り出してもともと存在しなかった境界線を引き、あたかもそれが自然的な相違性であったかのように表象させることで「実体」を作り出すのである。かくして多くの国家が作られてきた。近代ヨーロッパに端を発したナショナリズムは、当初の市民革命的なもの¹⁰から、ナチズムに頂点を迎える他者排斥的・暴力的な形態に至るまで、さまざまに変質を遂げている。その中で、以上見てきたようなネーションの物語性はほぼ一貫して共通していると言えるであろう。

ナショナリズムが物語であるということは、その分析にとって、これまでさまざまな物語分析を行ってきた文学研究の手法が有効であるということを示唆している。「誰が物語るのか」¹¹、「どのような物語であるか」、「どう語るのか」といった語りの特徴やメカニズムを文学研究の手法で分析することが、ネーションやナショナリズムをめぐる言説の分析にとって新たな課題として浮上する。ネーションという物語に文学研究の立場からアプローチする意味もここにある。

3. 「物語欲求」の産物としての歴史

「歴史」もまた「物語」¹²である。Geschichte (独), history (英), histoire (仏)といった語がいずれも「歴史」でありかつ「物語」をも意味していることは、改めて指摘するまでもない。ヘイドン・ホワイトは、『メタヒストリー』以来の著作において、歴史とフィクションとが何れも厳密には区別できない物語論の様式で構築されているとして、歴史が「構築された物語」であることを確認している。むろんそれに対して、危機感を抱いた歴史家からさまざまな反論もなされている。例えばギンズブルグはホワイトを批判して、「歴史叙述には(どんな歴史叙述にも程度の差こそあれ)物語的な次元が含まれているということが強調されるとき、そこには、フィクションとヒストリー、空想的な物語と真実を語っているのだと称している物語とのいっさいの区別を、事実上廃止してしまおうとする相対主義的な態度がともなっている」¹³と主張する。確かに、もし仮に、史実として確認すべき事実をも創作してしまうことになれば、それこそ歴史と物語の間の「いっさいの区別」をも廃止する結果となり、その

とき歴史は、テレビの大河ドラマと変わらぬ「歴史物語」へと転落してしまう。その意味でむしろ、個々の史実の真偽確認は歴史学にとっての基本前提であるのだが、その上で、歴史の中で生じた個々の事実が点であるとするなら、点と点をつなぐ線、すなわち「なぜ或る出来事がおこったのか」、「或る出来事と別の出来事とはどう関係するのか」といった話の筋道、すなわち歴史記述が、すでに特定の視点からの仮説や解釈でしかありえず、観察者という主体が「語り手」として関与する物語でしかないことは、確認しておく必要がある。いかに史料を集め、綿密な考証を経て、記述の信憑性を高めたとしても、歴史を全知全能の語り手（auktorialer Erzähler）の立場から語ることは本来不可能である。最近の日本では、野家啓一が「歴史の物語り論（narrative theory of history）」を展開して、次のように述べている。「歴史は超越的視点から記述された『理想的年代記』ではない。それは、人間によって語り継がれてきた無数の物語文から成る記述のネットワークのことである。」¹⁴ それぞれの出来事は、物語の中に位置づけられて初めて意味を付与されるのであって、歴史は何らかの視点から再構成された歴史記述という物語の集合体でしかあり得ない。

リオタールは、啓蒙を通じての解放といったメタ物語に対する不信感を露わにし、この不信感をポストモダンの条件としてあげた。にもかかわらずその後も、大きな物語は終焉を迎えるどころか、世界規模の物語を作り上げようとする欲求はとどまるところを知らない。たとえば、米国大統領ジョージ・W・ブッシュは、9.11事件からイラク戦争を生み出すための物語を自由と正義の名の下に捏造し、現実において膨大な数の犠牲者を生み出すための周到な準備を行なった。「大量破壊兵器の存在」などといった、戦争正当化のために次々と持ち出されたその「悪からの解放」の物語は、実際の戦争が歴史（Geschichte）として記述される前にその道筋を提示しようとする物語（Geschichten）であった。説得力があったとは言えないこれらの物語が、少なくともイラクでの戦争開始を正当化する最大の根拠として利用され得たという事実は、ブッシュがその時点で「物語の戦い」に力で勝利していたことを示している。靖国神社をめぐる日中間の議論もまた、個別の過去をいかなる現在の物語に取り込むかという「物語たちの戦い」が依然として続いている例証である。

19世紀から第二次世界大戦期まで、ネーションという物語は他の物語よりも圧倒的優位に立ってきた。国家という存在と結びついたネーションの物語の命脈は、今でも尽きてはいない。とはいえ、国家的規模で共同体の成員を一つの目的に向けて統一するためのイデオロギー装置としてのネーションという物

語は、近年になってその空洞化や綻びが目立つようになり、ネーションの終焉が語られるようになってきている。¹⁵ そしてそれに呼応するかのように、身の回りに日常的で小さな物語の数々がメディアを通じて溢れかえる事態を迎えている。そうした日本の現状を分析したある経済学者は、「物語の時代」を迎えていることが景気回復に役立つと歓迎している。即ち2004年という年は「セカチュウ」や「冬ソナ」のブーム、負けても走り続ける「ハルウララ」、アテネ・オリンピックでの日本選手をめぐる感動の物語といった一連の物語に彩られていた、というわけである¹⁶。テレビは「そのとき歴史は動いた」とか「プロジェクトX」といった、感動を増幅させる物語仕立てに歴史を演出することで、人々の「物語欲求」に応える物語の粗製濫造に勤しんでいる。起承転結のサクセス・ストーリーや悲劇でなければ歴史とは言えないという暗黙の前提が、資本主義の論理下にあるメディアの日常を支配しているようである。これらの「小さな物語」は、現在の日本におけるネーションの問題とはどのように関係しているのであろうか？ 話題になるのは「プチ・ナショナリズム」（香山リカ）だけではない。特攻隊で亡くなった少年兵たちが、果たして暴走する国家の犠牲となって無駄死にしたのか、それとも何らかの意味ある物語の中に位置づけられるべきなのか¹⁷、という議論は、「物語の戦い」という歴史記述の最前線の問題であり続けている。日本だけにとどまらないこの種の小さな物語を求める強い欲求の数々が、再びネーションをめぐる物語再構築へと環流してゆく可能性を内包しているのか否かは、依然予断を許さない。

4. ドイツにおけるネーションと歴史

ネーションは物語であり、そして歴史は物語である。とすれば、物語を媒介とする形で、ネーションと歴史も、等価で結ばれ得る。それを典型的な形で示すのが、国家的統一が遅れたドイツの近代史であった。近代ドイツにおけるナショナリズムの展開、そして当時のドイツの文学や芸術が、日本にいる現在のわれわれにとってもとりわけ興味深いゆえんである。ドイツにおいて物語としてのネーションを根拠づけたのは、物語としての歴史であった。

ドイツ・ナショナリズムにとって中核となるべきNationalgeist（国民精神）という用語が、ヴォルテールを借用したカール・フォン・モーザーによるフランス語からの翻訳語（1761年）として始まったことが象徴的に示すように¹⁸,

ネーションをめぐる議論は、ドイツにとって模範となる先進国であると同時に脅威を与える隣国でもあったフランスに対抗する形で始まった。もっともその際、目指されたのは民主的で近代的な統一国家の実現ではなく、その空白を補填すべき「内面における偉大さ」であった。例えばフリードリヒ・シラーの名は、欧州連合歌にも採用されているベートーヴェンの第九交響曲「歓喜の歌」(1785年)の詩を通して人類博愛の思想に結びついているが、その同じシラーが、フランス革命から8年後の1797年、「ドイツの偉大さ」という思想詩の構想の中では次のように歌っている。

「ドイツという国 (deutsches Reich) とドイツ人 (deutsche Nation) とは / 別物だ。ドイツ人の尊厳が / その君主たちに由来したことなどは / 未だかつてない。政治とは別の地点で / ドイツ人は、独自の価値を / 築いてきたのだ。たとえ / 国が減じようとも、 / ドイツの尊厳は無傷の / ままだ。// それは倫理的偉大さであって、文化の中、 / ドイツ人 (Nation) の性格の中に宿っており、それは / 政治的運命とは関わりがない。」¹⁹

やがて19世紀後半から20世紀前半にかけてReich (ドイツ帝国) がめざましい発展を遂げ、第一次世界大戦を迎えるに至っても、内面における文化や精神の偉大さをドイツの「倫理的偉大さ」として掲げるシラーのこの発想は、そのまま多くのドイツ人たちが抱き続けるものとなるであろう。

しかし、初期ロマン派の人々が内面の王国における無限の反省と夢を求める文学を花開かせた直後の1806年に神聖ローマ帝国がナポレオンによって崩壊させられたとき、ドイツ知識人たちの挫折感と危機感は大きかった。それ以前はドイツでも育まれつつあった啓蒙主義の普遍理念も、敵国フランスの革命を担った思想として今や急速に支持を失い、ナショナリスティックな言説構成に取って代わられたのである。このとき行われたフィヒテの連続講演からドイツ・ナショナリズムが本格的に始動したことは、もはや言うまでもない。後にナチズムにつながるような排他性、攻撃性、支配欲の芽がフィヒテの演説に潜んでいたか否か、という問いはここでは問わない。確認しておくべきなのは、未だ農業に支えられた身分制小国家の集合体であったドイツにおいて、しかも来たるべき国家の政権形態も版図も確定しない惨めな状況の中で、知的言説に関与し得たフィヒテを始めとする一部市民・知識人たちが、内面性の優位や言語や歴史といった文化的主題を軸に、ドイツというネーションの根拠作りの思考実験を開始せざるを得なかったということである。そしてその結果、確かにドイツ語圏においてはとてつもない文化的・芸術的豊饒が生み出されていっ

た。遅れてきた国であるドイツの「困惑の歴史主義」を支えたナショナリズムという代替世俗宗教は、隣国フランスにおける「自由」や「平等」や「民主主義」といった革命的政治理念を構成原理とする近代国家建設とは対照的に、歴史に根拠づけられた美と内面性を中心原理とする物語となったのである。後に若きトーマス・マンが「文明に対する文化の優位」と誤解したのも無理からぬ事態である。

例えば、同じゲルマン人である（とされた）フランス人に対するドイツ人の優位を根拠づけようと檄を飛ばしたフィヒテがドイツ人の優位性の拠り所としたのは、ursprünglich（始原的）という形容詞であった。ゲルマン人の中でもドイツ人のみがursprünglichな地にとどまり²⁰、ursprünglichな風習に従う始原的民族（Urvolk）、基幹民族（Stammesvolk）であり続けていることは「歴史の中で証明されて」²¹ いる、とフィヒテは語る。中でも重要なのはドイツ語という言語であって、異質なものを受け入れて混じり合ったりすることなく固有でursprünglichな言語を保持し続けているがゆえに、ドイツ語はフランス語のように死んではない「生きた言語」であり続けており、このドイツ語がドイツ人を作り出すのだ、というわけである²²。Ursprung（歴史の始原）を自らの側に差し押さえた形の物語を創作することによってネーションを根拠づけようとするフィヒテの論理は、「もっともらしく語られるが、しかし実は何の根拠もない物語が歴史とネーションを媒介する」という、ネーションをめぐる言説構築のあり方をきわめて典型的な形で示すものであるが、むろん語っている当人は大まじめに信じ切っている。かくしてドイツのナショナリズムの起爆剤となったフィヒテの演説がドイツ人というネーションの確立のために訴えたのは、初期ロマン派の詩人たちと同様、Ursprung、すなわち「始原」へと至る歴史の認識であった。ドイツ知識人たちがこの時期統一国家を求めて抱いた「物語欲求」は、とりわけ「歴史欲求」という形を取ってゆくのである。

5. 記念碑文化とドイツ文学研究の成立

Ursprungを模索するドイツではその後、ロマン派的な中世回帰を経て、空前の歴史ブームを迎えることとなる。19世紀は国民国家の成立を目指すドイツにとって「歴史の世紀」であった。それを視覚的・象徴的に今に伝えるのがドイツにおける記念碑（Denkmal）の文化である。記念碑とは本来、何らかの実用ないし祭祀に用いられた歴史的建築物が時代を超えてそのまま、ないし遺

跡として残ったものを指すのであって、実際の歴史を直接背負った記念碑はギリシャ・ローマに今なお数多く存在している。その後も王や将軍の榮譽を記念する像などが、記念碑としてヨーロッパ各地に作られてきていた。しかし、イタリアなどとは対照的に長い歴史を誇る歴史的建造物に乏しいドイツにおいては、自分たちの「歴史欲求」を満たしてくれる記念碑は自ら作り出すしかない。かくしてドイツでは、18世紀古典主義時代以来のギリシャ・ローマ古典古代文化への憧憬に基づいて、ギリシャ風の神殿や墳墓の形式、ローマ風の壮大な様式、ときにはエジプトのオベリスクまでが模倣されるのみならず、ゲーテが「ドイツの様式」として褒め称えたゴシック建築を始めとする各種ゲルマン的意匠もドイツ固有のスタイルとして混合されて、未だ存在しないドイツの精神を美的に表象するための独自の（つまりはあちこちからの引用だらけの）擬古典主義が作り出されていった。こうしてベルリンやミュンヘンなどの都市は、擬古典主義に基づく都市計画によって相貌を一変する。さらに、とんでもない郊外にドイツの神話伝説中の人物であるヘルマンやゲルマニアなどの巨大記念碑が立てられてゆく一方で、あちこちの町や村にはゲーテ、シラー、ルター、ベートーヴェンといった近代のドイツ偉人の像が雨後の筍のように立てられていった。ご当人たちがいかなる思想の持ち主であったかにはかかわらず、偉大とされるドイツ人は次々、物語としての歴史に組み込まれて回収され、未だ国家としての自己実現を達成していないネーション物語の美的表象のために貢献させられていったのである。墓石のデザインに至るまで、歴史を感じさせてくれる廃墟や古典建築を模した様式で作るのが当時は流行したのであった。

19世紀ドイツに乱立することとなったこれら大小さまざまな記念碑は、捏造してまで歴史を欲した当時の「物語欲求」・「歴史欲求」の大きさをこそ、今に伝えてくれている。16世紀半ば以来道半ばにしてうち捨てられていたケルン大聖堂の建築が1840年代に再開されたのも、こうしたナショナリスティックな「物語欲求」の文脈抜きには考えられない。こうしてドイツはさまざまな記念碑で溢れることとなった。中でもレオ・フォン・クレンツェが設計した「ヴァルハラ」（1830年定礎、1842年落成）は、百名ほどの「ドイツの偉人たち」の胸像を並べて祀る、ドナウ川のほとりに立つギリシャ風神殿として、この時代の記念碑文化の精神を見事に象徴していると言えるだろう。ドイツ統一以前のネーション物語は、必ずしも常に権力と結託していたわけではなかったが、プロイセン王やバイエルン王と折り合いのつく部分で表現手段を見出したネーション物語と歴史理解は、かくして自分たちがいかに切羽詰まった物語欲

求に苛まれていたかを雄弁に示すドキュメントを、数多く残していったのである。²³

歴史の時代としてのドイツ19世紀を代表する建造物が記念碑であるとするなら、文学の世界でも、19世紀に制度化される「ドイツ文学研究」は、まさに同じ記念碑文化（Monumentalismus）の一翼を担うものであった。ドイツにおける文学研究は、ドイツ民族精神の記録を探し求めるロマン派的営為から始まったものである。シュレーゲル兄弟を始めとするロマン派の人々は、やがてポエジーの理論からルーツ探しへと関心を移し、中世を「発見」してゆく。必ずしもドイツのみにこだわったわけではなかったヘルダーを嚆矢とする民族歌謡（Volkslieder）の収集は、ブレンターノ、アルニム、ティークといったロマン派の詩人たちへと受け継がれ、古いドイツの伝説（Sagen）やメルヒェン、民衆本（Volksbücher）の中に無名の民衆による素朴な表現なるものを見出す動きへと発展していった。こうして神聖ローマ帝国の崩壊と軌を一にするかのように「ドイツ的なもの、古いもの」なら何でも片っ端から収集しようという一大コレクションブームが到来する。そうした寄せ集め集の一つであるEberhard Gottlieb Grafによる3巻本（1826年）のタイトルを借りるならば「ドイツ語とドイツ文学による記念碑たち」（Denkmäler deutscher Sprache und Literatur）がどんどんコレクションされていったというわけである。そうしたコレクターの中には「ロマン派の人々による詩的関心からの収集者、文化史研究を志すゲルマン古代研究家、ドイツ人の精神教育に利用しようとする教育者、テキストの批判的検証を目指す文献学者、そして何でも収集するコレクター」²⁴など、さまざまな傾向が入り乱れていたというが、いずれにしても物語り得る自らの歴史を発見することに情熱を傾けた彼らのコレクションの様相は、ドナウ河畔に立つ「ヴァルハラ」が表現する記念碑の精神と、なんと見事に一致していることだろうか。これがドイツ文学研究の始まりの姿である。

こうした発見者たちが、自らの功績を強調するために、それまでうち捨てられ忘れ去られていたものを彼らが自分で発見したのだと誇張して主張し過ぎていることを、フンガーは指摘している。²⁵とはいえ、ギリシャ・ローマの古典文学の陰に隠れて18世紀まではあまり見向きもされて来なかった中世ドイツの文献がこの時期次々「再発見」されていったことは否定できない。この文脈でとりわけ象徴的な役割を果たしたのが「ニーベルンゲンの歌」である。この作品について、例えばフリードリヒ大王が或る手紙の中で「こんなものは過去の埃を払って取り出す価値などない、少なくとも自分の書架に置くには耐え難

い、すぐにでも放り棄てるだろう。」²⁶と書き記したのは1784年のことだったが、それからたった30年ほどしかたっていない1815年になると、解放戦争を戦う兵士たちは、こぞってアウグスト・ツォイネ編集による陣中版（Feld- und Zeltausgabe）「ニーベルンゲンの歌」を背負って戦地に赴いたと言われている。同じく「ニーベルンゲンの歌」を現代語で編集し1807年に出版したフリードリヒ・ハインリヒ・フォン・デア・ハーゲンは序文に「怒濤の嵐の局面を迎えて、やっとドイツでも、尊敬すべきご先祖様たちの言語や作品に対する愛が芽生え、盛んになってきた。あたかも、現在痛ましい形で没落しているものを、過去と詩の中に求めようとしているかのようである」²⁷と記し、1810年のベルリン大学設立に際して最初のドイツ文学教授として招聘される。こうして学として成立した「ドイツ文学研究」の当面の課題は、ナショナリズムがまだ（諸侯にとっての体制転覆を招きかねない危険思想として）警戒される時代にあって、18世紀以前のドイツ文学作品を文献学的に整理・編集し、「ドイツ文学史」を通してドイツ民族の歩みという歴史物語を作り上げることであった。この課題は、数多くの浩瀚なドイツ文学史、とりわけゲルヴィーヌスの『ドイツ人の国民文学の歴史（Geschichte der poetischen National-Literatur der Deutschen）』（1835-42）において結実する²⁸。ドイツのネーションと歴史とが、こうして文学史という新作物語を通して等価で結ばれてゆくこととなる。未だドイツ国家が成立していないこの段階において、ネーションの歴史を文学の面から物語って基礎づけるという課題を担ったドイツ文学研究は、ナショナリズムを根拠づけるために制度化された学術分野として、ベルリンを端緒に少しずつ拡充され、やがて来るべき3月革命を、そしてドイツ帝国の建国を待つのであった。

6. グリム兄弟が創作したもの

ゲルヴィーヌスと並んで19世紀におけるドイツ文学研究の歴史に最も大きな足跡を残したのがグリム兄弟、とりわけ兄のヤーコプ・グリムであることに異論はないだろう。そもそも Germanistik という名称を文芸学（Literaturwissenschaft）であるドイツ文学研究（deutsche Philologie）にもたらしたのはグリムであって、ゲルマン法学に由来するこの概念をもともと法律学者だった彼が文学研究に援用することがなければ、この名称が現在はおそらくドイツ文学研究を指して用いられるという事態にも至らなかったのではない

かと思われる²⁹。ヤーコプ・グリムに法学と文学の間の橋渡しが可能であったのは、彼が生涯にわたって「歴史と法と言語のトリアーデ」(堅田剛)³⁰を追究し続けたからであった。このグリム兄弟がわれわれの議論にとってきわめて興味深いのは、「物語によって媒介されるネーションと歴史」の構造を、彼ら自身が、意識しないまま見事に体現しているからである。舞台は、かの有名な童話集である。

兄ヤーコプ・グリムがもともと法律家であり、また音韻変化に関する「グリムの法則」や『ドイツ語辞典』編纂で知られる言語学者でもあったことは、近年日本でもグリムを語る者の間では必ず意識されるようになっていく。きわめて多様なテーマへの関心を持ってさまざまな研究を行い、言語、古事法、伝説、民話といったさまざまな対象をフィールドワーク的に収集したグリム兄弟の精力的な活動とその広がり、まさに驚嘆に値するものであって、メルヒェン収集はそうした兄弟の膨大な活動フィールドのほんの一端を形作っているに過ぎない³¹。法学と歴史学と民話収集は、現在では全く別の学術カテゴリーに属するが、ヤーコプ・グリムにとっては一つの関心に集約されるものであった。というのも、彼にとっては法の中にはポエジーがあり(「法の内なるポエジー」³²)、言葉と法は一つの共通する歴史を持っており、そしてその歴史とは、民間伝承として語り継がれてきた物語(ポエジー)によって表現されるGeschichteのことだったからである。従って、彼の多様な関心を一言でまとめるならば、ドイツの原言語(Ursprache)の世界を再構成することによってドイツの民衆(Volk)の歴史的本質に迫るという一点に集約することができるだろう。その意味で、言語というチャンネル、歴史法学というチャンネル、そして民間伝承として語り継がれてきた民話・伝説などのポエジーというチャンネルを通して、ドイツ人(Germans)の本質を探ろうとしたヤーコプ・グリムのさまざまな営為の総体が、彼にとってのGermanistikなのであった。

こうした明確な立場に立ってさまざまな古事法やドイツ語表現、伝説や民話の収集を精力的に行なったグリムであれば、ザヴィニーに強く影響を受けながらやがて慣習法を重視することとなる法学の分野においても、あるいはドイツ語のさまざまな用例を収集した言語学においても、さらにはまた創作詩(Kunstpoesie)よりも自然詩(Naturpoesie)を重視した文学の分野においても、彼の情熱と関心が、完成度の高い芸術性の追求にではなく、民衆や言語の素朴な始原的(ursprünglich)風景の復元にこそ向けられていたのは当然である。その熱意を最も雄弁に表すドキュメントが、グリム童話集初版(1812年)

の序文である。長くなるが、引用してみたい。

「私たちは、これらのメルヒェンをできる限り純粹(rein)な形でとらえようと努めました。多くのメルヒェンにおいて、押韻や韻文によって話が遮られていると感じることでしょう。はっきり頭韻を踏んでいるものさえありますが、話すときに歌われることはないのであって、まさにこうしたものこそが最も古く、最も良いお話なのです。いかなる細部もつけ加えられたり(hinzugedichtet)美化されたり(verschönert)変更されたり(abgeändert)はしていません。なぜなら、それ自身でもうこんなにも豊かな話を、アナロジーや連想でふくらませるのは畏れ多いと思われたからです。これらの話は創作不能(unerfindlich)なものなのです。こうした意味でのメルヒェン集は、ドイツにはこれまで存在してきませんでした。ほとんどの場合、メルヒェンはもっと大きな物語を創作するための素材として使われ、そんなことをしなくても十分に価値のあるメルヒェンが恣意的に拡大されたり、変更されたりしてきたのです。その結果、本来子どもたちのものであるはずのメルヒェンはその手から奪われてしまい、子どもたちには何一つ与えられないことになってしまいました。」³⁰

原典には一切手を加えない、との明快で高らかな宣言であり、またメルヒェンに手を加えてアレンジしたがる当時の「悪癖」に対する痛烈な非難である。ここに書かれていることは現在の民俗学的なフィールドワークにとっては当然の前提であろうが、ロマン派の詩人たちによる創作メルヒェンが高く評価された当時としては画期的なことであった。上に述べてきたようなヤーコプ・グリムの仕事全体から判断しても、弟ウィルヘルムが書いたこのメッセージに示される「原文に忠実に」という原則が、二人にとって最も大切な部分であったろうことは疑い得ない。ヤーコプも同じ時期(1811年1月)、それまで「自分たちの民族の昔の様子(des eigenen Volks Alterthum)に対する尊敬の念が欠けて」いたために散逸してしまっている「全ドイツ祖国における口承伝説(allemündliche Sage des gesammten deutschen Vaterlandes)」³⁴を手遅れにならないうちに収集することを目指して、聞き取りの実施を呼びかけるアピールを各新聞社に送って次のように記している。

「こうしたことすべてを私たちは、最高に忠実に、一文字ずつ忠実に(höchst getreu, buchstabentreu)に記録して欲しいと思います。いわゆるナンセンスな部分も含めてです。ナンセンスな部分はどこにでも簡単に見つかるものであって、とかく人工的な書き換えに代えてしまいたがるもの

ですが、それによって元のテキストを失わせてしまうことはもっと簡単なことなのですから。」

また弟ヴィルヘルム・グリムもまたゲーテ宛の手紙の中で「何も外から付け加えることなく、民衆の持つ本来のポエジーの見方や思いを描くこと」³⁶の重要性を強調している。そして実際、グリム兄弟が収集した資料に対しては、改竄などはあるはずもないという絶大な信頼が、比較的最近まで寄せられ続けてきた。メルヒェンを伝えたのがマリーおばさんら農民出自のドイツ人であり、そこに生粋のドイツ人の民衆の言葉がそのまま伝えられているのだ、という点に疑いが差し挟まれることは長らくなかったのである。グリム童話には純粹のドイツ精神が現れているとする信仰は、ナチズムによる濫用を生きのびて、戦後もしばらく語り継がれてきたのであった。

グリム兄弟がこの宣言を自ら見事に裏切ってテキストの変更を重ねてきたという事実は、本来であれば、グリム兄弟の生前に出版されていた7つの版を比較するという単純なテキスト・クリティーク作業によるだけでも、すぐに明らかとなるはずであった³⁷。さらに、この高邁な序文をいただく1812年の初版自身が、1810年段階のグリム兄弟の手稿と大きく相違していることは、この手稿自身が1924年、1927年、1964年、そして1975年、と4度にもわたって別々の編集者の手によって出版される過程において話題になってしかるべきであった。4度も別の形で出版されたにもかかわらず始めの3回が何の反応も呼ばずにほぼ黙殺されてきたという事実は、グリム童話を神話化したがつてきた1970年代以前のドイツ文学研究の体質を表していて衝撃的ですらある³⁸。グリム童話のテキストの口承原典に対する忠実性が疑問視され始めたのは、70年代になってようやく、ハインツ・レレケの一連の研究をきっかけにしてであった。レレケは、1810年手稿を4人目の編集者として1975年に出版してやっとグリム童話のスタンダードな研究資料として定着させただけでなく、代表的な語り手である「マリー」がドイツの庶民ではなくフランス系の良家の娘であったことを明らかにする論文などを通して、グリム童話の脱神話化の第一歩を記したのである。その研究はドイツのグリム観に「大きな混乱」³⁹を与え、伝統的なグリム童話愛好家・研究者からはときに反発の声も強かったという。

そうした強固な「グリム童話の神話化」の伝統に対していらつきを隠さず、そこに悪意あるイデオロギー操作をすらすら読み込んで激しい批判を展開したのは、アメリカのドイツ文学者ジョン・M・エリスであった。彼の『一つよけいなおとぎ話』（1983年）は、グリム兄弟が意図的に改竄・隠蔽工作を行なった、

さらには、並みいるグリム研究者たちがこうした事実を「見て見ぬふりをするための方途を探して悪戦苦闘を続けてきた」⁴⁰と断罪する。なるほど確かに、1812年の序文を読んだ上で1810年手稿から初版を経て第7版へと至るグリム童話の個々の変更点を検討し、またこれまでのグリム童話をめぐる研究者たちによるディスクールを概観するなら、エリスの批判には頷ける点が多い。が、レレケを含むグリム研究者たちの抑圧的伝統を糾弾する彼の論文は、グリム信奉者たちからは感情的な反発をも呼んでゆく。グリム兄弟が意図的に嘘をつき、「都合の悪い事実を隠蔽」⁴¹し、「詐欺と贋作」⁴²を重ねたと糾弾するエリスの議論があまりに激しく否定的であるためか、その後のグリム研究に決定的な影響を与えた様子は、その内容的な説得力に比して意外に少ないようにも思われる。

エリスの議論を、感情的な断罪や犯人捜しのレベルで終わらせてしまうのは、グリム童話それ自体を正しく位置づけてゆく上でいかにも残念なことである。問題は、グリム童話がエリスの言うように意図的な「詐欺と贋作」ではなかったとするなら、「いかなる細部もつけ加えられたり美化されたり変更されたりはしていません」と大見得を切ったグリム兄弟の当初の意図が、なぜ結果的にこれほど大きく食い違う結果となったのか、という点にある。むろん、なぜこうした変更が行われてきたのかについて、さまざまな説明の試みはなされてきている。例えば、初版は学究肌のヤーコプの影響が大きかったが第2版以降はヴィルヘルムにまかされてしまったからではないかという説（これについては、エリスが詳細に反駁しており⁴³、否定されたと見てよいだろう）とか、初版に対するさまざまな批判⁴⁴に第2版以降で誠実に応えたからだ、とりわけ、学術資料的色彩を廃して子どものために語る童話の方向へと文章が書き改められていったのだ、といった説明もよく聞かれる。この点についてレレケは次のようにまとめている。

「メルヒェンの様式はみっともないものだとの批判をかわすために、また教養人たちから未だにひどく軽蔑され続けていたメルヒェンというジャンルに少なくとも言語的な美しさを与えるために、ヴィルヘルム・グリムはさまざまな努力を重ねた。その過程において、時としてまことにたどたどしくて奇異な民衆メルヒェンの調子でもなければ、高度に様式化された近代の創作メルヒェンの語り口とも異なる、全く新しい何かが誕生したのである。失われてしまった、そしていろいろな角度から見て完全だと信じられていた始原性（Ursprünglichkeit）を探求する中で、ヴィルヘルムは彼

自身の独特なメルヒェンの調子を発見したのだった。」⁴⁵

日本におけるグリムと童話研究の第一人者である小澤俊夫もまた、メルヒェン収集から第7版（1857）に至る半世紀近い時間の流れも考慮しつつ、さまざまな版の比較を通じて、メルヒェンとしての様式・文体が試行錯誤の経緯を経て作り上げられてきた点を詳細に検討した上で、「メルヒェンや昔話の語りは、ふしぎにも一定の文法を持っています」⁴⁶として、むしろグリム兄弟がメルヒェンとしての理想の語りのスタイルを模索する過程の中で、版を重ねる毎に、世界中の子どもたちに読まれるメルヒェンを作り上げていった成果を肯定的に評価している。

これらの点についてはまさにその通りであって、確かにアルニムやブレンターノやA. L. グリムらによって批判された初版のままであれば、恐らくその後のグリム童話の世界的成功はあり得なかったことであろう。にもかかわらず、まさにこうした洗練化や文体・筋書きの変更作業自体が、1812年の初版で（さらには1819年の第2版の序文の中でもまだ）はっきりと謳われていた「いかなる細部もつけ加えられたり美化されたり変更されたりはしていない」という宣言に真っ向から反していることは明らかである。くどいようだが、1812年初版の時点で既にメルヒェンのテキストが1810年手稿とは大幅に違っているのは事実である。にもかかわらず、兄弟がそれを追加や美化や変更とはみなしていないのは、いったいどう説明がつくのであろうか？ エリスが行なったような、兄弟の悪意を邪推しての断罪は控えるとしても、この矛盾が何を意味するのかは、検討しておく必要がある。

この矛盾を説明するための一つの可能性は、こうした文章変更の作業を、グリム兄弟が本心から、追加や美化や変更とは全く見なしていなかったのではないか、というものである。もしそうであるなら、初版序文における宣言においても、彼らは嘘をついたところか、何の良心の呵責もなく堂々とそれを書いたこととなる。この文脈で興味深いのは、ヤーコプ・グリムが当時、原文に対する忠実さ（Treue）を2つに分けた議論をしていることである。即ち、「数学的忠実さ（mathematische Treue）」と「正しい忠実さ（rechte Treue）」という区別である。アルニムに当てた手紙の中で彼は、メルヒェン収集にあたって重要となる「忠実さ」について次のように書いている。

「聞き取った原文に対する数学的な忠実さは、結局は不可能であって、極めて厳密な物語においてもそんなものはあり得ない。が、それは構わないことだ。なぜなら、忠実さとは真なるもの（etwas wahrenes）のことであっ

て単なる見せかけのことではないからだ。それを私たちは感じるし、だから忠実さに対しては不忠実というものがはっきりと対置されるのだ。」⁴⁷

つまりヤーコブ・グリムは、聞き取ったメルヒェンを今日で言う文献学的忠実性を持たせて聞いた通りに再現するのは不可能だしそもそも無意味であって、自分たちは別の忠実さ、すなわち「真なるもの」を伝える「正しい忠実さ」をもってメルヒェンを伝えるのだ、と言っているのである。せっかく聞き取った原テキストに対して実はあまり敬意を抱いていなかったことを正直に暴露しているという意味で驚かされる発言ではあるが、ここはひとまずグリムの言う通りだとしよう。しかしそれならば、いったいどのようにして彼らは、「正しい忠実さ」が自分たちにだけは保証されていると考え得たのであろうか？

兄弟がこの「忠実さ」を確信できた理由として考えられる一つの仮説は、グリム兄弟が自分自身たちを、メルヒェンにとっての他者とはみなしていなかったからではないか、というものである。そもそも民衆が共有しているはずのメルヒェンの語り手には、個人主義的な近代の小説と同じように固有名詞が付されるのはふさわしくない。民衆という共通の集団の中で自然発生的に生まれてくるボエジーは、集団で共有されるべきものであった。ヴィルヘルム・グリムは、*Volkslied*についてであるが、例えば次のように書いている。「民衆歌謡は誰が書いたかという作者探しはやめた方がよいだろう。成果があるはずもないのだから。民衆歌謡はひとりでに生まれる (*dichtet sich von selbst*) ものであり、行為から自然と花咲き出てくるものなのだ。」⁴⁸ 誰よりも熱心に民衆の言語やボエジーを採求し続けたグリム兄弟が、自らを民衆の一員でありその精神に関与していると思いこんだとしても不思議はない。メルヒェンや民衆歌謡が集団の中で自然発生的に生まれるとすれば、無数の「無名の語り手」たちがそれを担っているはずであるから、誰から聞き取ってもよいことになる（それを示すように、グリム兄弟がメルヒェンを聞いた相手はかなりの偶然的選択に委ねられていた）し、逆に個々の語り手が紡ぎ出す個別のテキストには（同じ話であっても「誰が話しても一字一句同じ」ということは実際にはあり得なかったであろうから）それほど重きを置く必要はないと考えたのかもしれない。そうしたグリム兄弟が、書き取ったメモに不完全な部分が残った場合に、「数学的忠実さ」をもって、つまりは無意味な不完全さまでも含めて忠実に再現するのではなく、欠けたところを補いテキストに潜んでいる精神をこそ十全に発展させた形で公表する方がより「正しい忠実さ」であったと考えたとしても不思議ではない。加筆修正するにしても、民衆の精神を代表して自分が行なって

いると信じ込んでいたとするならば、その作業はポエジーが「ひとりでに生まれる」のと変わりがないと認識されたことであろう。民衆集団の内部にいることを自負したであろうグリム兄弟にとって、加筆訂正は以上のようなメカニズムによって「理想化」でありこそすれ、「追加」や「美化」や「変更」と意識されることはなかったのである。かくしてグリム兄弟は、自分たちが語り手として書いたメルヒェンであるにもかかわらず、その「語り手」が名もなき民衆であると最後まで信じて疑わずにいることができたのだと考えられるのである。

普通に見るなら、グリム兄弟が加筆修正したメルヒェン、就中「白雪姫」のように大幅な加筆修正がなされて「原型」をとどめていないメルヒェンは、エリスの言う通り、もはや創作メルヒェンないしフィクション以外の何者でもない。いくら世界中で愛されるメルヒェンであっても、民衆の声をそのまま伝えているものだとは言えないのである。そもそもなぜグリムたちがメルヒェンの収集を思い立ったのか、改めて思い出しておくこととしよう。1812年初版の序文の中で彼らは、自分たちが「かつての時代のドイツ文学（deutsche Dichtung）の豊かさを見、そしてかくも多くのものから生き生きとした形では何も残っていないしその記憶すら失われてしまっていて、結局僅かに残ったのは民衆歌謡とこれらの無垢なメルヒェンだけでしかない様子を見」⁴⁹ている、と記している。そして彼らは、夏にひっそりと実った穂を善良な手が見つけて大切に扱ってくれるなら、未来のために残ったたった一粒の種子となることがあるのと同じように、自分たちもまたこのメルヒェンを収集することによって、かつての豊かなドイツの民衆の文学をよみがえらせたい、と言うのである。

これこそは、ゲルマニストとしての彼らの物語欲求が作り上げたVolk（民衆）ないしNation（ドイツ人）という共同体の物語であり、「一つよけいなおとぎ話」であった。グリム兄弟が探し求めた民衆共同体の始原（Ursprünglichkeit）にいる理想の語り手とは、実は自分たち自身のことでしかなかったのである。グリム兄弟が「Volkという物語」の語り手となった瞬間である。彼らはこの物語を確かに虚偽やフィクションとは全く思っていない。（やましいところがあったなら、彼らはあのような序文を臆面もなく書きはしなかったであろう。）先に述べた通り、ネーションという物語は、自らをフィクションであるとは認めず、あくまでノンフィクションであると標榜する点に、大きな特徴を持っている。グリム兄弟はUrspracheや民衆の声を求め、生涯をかけて膨大な資料を残していったのであるが、実際に彼らが童話集出版を通し

て行なったのは、メルヒェンの収集ではなく、民衆共同体によって共有されるメルヒェンなるものがそもそも存在するかのようなフィクションの創作だったのである。その様子は、「歴史欲求」に突き動かされた19世紀のドイツ人たちが各地に記念碑を建てていったのと酷似している。探しても見つかるはずのない歴史的記念碑を、ドイツ人たちは自ら建造するしかなかったわけだが、そのとき歴史捏造の意識があったはずもない。同様にグリム兄弟は、メルヒェンにさまざまな手を加えることによって、始原的民衆が残した真正なドキュメントとしてのメルヒェンが存在しているというフィクションをこそ物語り続けたのであった。このフィクションの自己完結性は極めて強固であり、その結果兄弟はやがて、聞き取ったメモだけでなく書物として伝わっているメルヒェンを書き換えて童話集に載せるようなことまでも平気で行なえるようになってゆく。兄弟が単にメルヒェンを収集しただけであったかのような神話は、このフィクションの単なる副産物に過ぎない。

以上、民衆が伝承してきた物語としてのメルヒェンを語るというグリム童話の姿勢そのものが、「ドイツ民衆の真正な声」なるものが存在するというメタ物語に依拠するものであることを明らかにすることができたと思う。このメタ物語がフィクションであることにグリム兄弟が気付くことはなかったのと同様に、いやまさにその結果として、彼らは、個々のメルヒェンに対するこうした著しい加筆・修正・変更が、本来自分たちが最も嫌悪していたはずの捏造行為そのものを意味することに気付くことはついになかった。彼らの確信犯的な加筆・修正行為が成立した構造は、ネーションというフィクション物語を無意識の内にノンフィクションだとして語る確信に満ちた語りの構造と相似形である。むろんこれらのことは、グリム童話が世界中の子どもたちに愛される優れたメルヒェンとなったこととは別のことがらである。ちょうど、ドイツ・ナショナリズムが、一見ドイツ・ネーションの問題とは全く何の関係もない優れた普遍的芸術作品を19世紀に数多生み出したのと、その関係はよく似ている。

7. ポスト・ネーション時代における記憶と物語の行方

近代における学術や芸術、そしてとりわけ文学は、ネーションという物語と歴史という物語によって、大きく規定されてきた。文学がしばしば、ネーションや歴史という物語を求める物語欲求の表現手段でもあった様子を、ここでは一見最も純真な世界に見えるグリム童話を例に見ることができた。今日、国家

に代わる別の選択肢が見えないまま、巨大化するメディアや資本と共生する形で物語欲求がますます増殖・迷走する傾向にある中で、ナショナリズムの終焉が語られ、ポストモダンにおける大きな物語の終焉が語られつつある。ホブズボームは近年のナショナリズム研究の進捗をミネルヴァのフクロウに喩えているが⁵⁰、一方で確かにナショナリズムはかつてのような絶対的物語としての力を失って多様化する中で使命を終えつつあり、例えばヨーロッパはネーション・ステートの解体実験すら始めている。とはいえ、EUの大きな目的がアメリカという超大国に対する対抗勢力としての超国家を形成する点にあるのは明らかのように、制度としての国家に代わる選択肢となりうる現実的な代替組織の姿は、未だ見えてきてはいない。ネーションに依拠してきたこれまでのさまざまな物語は確かに多方向に分散しつつあるが、だからといってネーションにまつわる物語が既に役割を終えて終息に向かっているとは、残念ながら（とりわけ日本では）思われない。ナショナリズムは19世紀ドイツにおいて、芸術・文化の驚異的な生産性を生み出したパトロンであった。本稿では、グリムのメルヒェンのような一見素朴な物語からもネーションの響きが聞こえてくる様子を観察することができた。シラーの詩に見たような内面と美の優位は、文化ネーション（Kulturnation）としての自負をもたらし、その伝統は、ドイツの現実に批判的な声をあげ続けている作家ギュンター・グラスにまで受け継がれている。文学を始めとする芸術は、今後も当分はこのネーションの圏域を準拠物語とし続けるのであろうか？あるいは、衰亡するネーション以外のいかなる物語と今後手を組むのであろうか。

ネーションの物語が孕む危険性を究極まで追求してしまったのが、例えば第二次世界大戦におけるドイツと日本であった。両国がもたらした言語を絶する悲惨な歴史の数々から得られる教訓的認識は、この二国だけにとどまらず、ネーションという物語を抱くあらゆる国や人にとって未だアクチュアルであり続けている。異文化としてのドイツ文化を研究することに大きな意味を与え続けているのは、こうしたドイツの、ネーションに関して戦前とは別の物語を作ろうとする姿勢である。その意味でドイツは日本よりも確かに脱ネーション化が進んでいる。むしろ、「過去との取り組み」はドイツでも儀式化・ルーティン化の危険に絶えず晒されており、そもそも後から生まれた世代がネーション単位でいつまでも過去の負の遺産を背負っていかなくてはならないのかは、大いに議論の分かれるところでもある。選挙のたびに極右政党の得票数が話題となり、ネオナチの若者がいつまでも新たに出現し続ける事態を見ても、ド

イツ連邦政府の公式行事や知識人たちの発言とは別のところに庶民の本音がまだまだ潜んでいることも否定できない。さらに、例えばギュンター・グラスのように、ドイツ人としてドイツに対し批判的なことを叫び続ける良心的知識人の存在は貴重であるが、ネーション単位で「過去の克服」を続けることによって、むしろドイツというネーション単位の議論の枠組みの固定と存続に貢献しているという皮肉な事態も観察できる。にもかかわらず、ドイツにおけるネーションの位置づけが戦前とは大きく変化したこと、そして新たなネーションの位置づけに対応する反省的な自己理解をドイツが模索し続けていることは、仮にそれが国際関係におけるドイツの地位を確保するための打算と結託した部分があることは否定できないとしても、高く評価できるものである。そうしたネーションに対する反省的な物語をめぐるせめぎ合いを表しているのが記念碑文化のその後の変貌である。機会あるごとに記念式典が催されるヨーロッパ地域であるにもかかわらず、戦後のドイツはネーションという物語を支えてきた記念碑文化に対しても自己批判的な姿勢を貫き、19世紀的記念碑文化に代えて、自らの加害の罪を思い出すための祈念施設や祈念日を数多く作ってきた。その結果生まれてきた、Denkmalに代わるGedenkstätte、Jubiläumに代わるGedenktagといった語を、そうしたものが存在しない日本語に訳すことはできない。「自虐史観」というシニカルなレッテルが幅を利かせる日本の現状とは際だって対照的な状況である。

政府が率先してドイツ人自らの罪と責任を直視するためのさまざまなGedenkfeier（＝自らの加害の歴史を思い出すための式典）を主催するドイツでは、社会が自らの負の過去に関していかなる物語を共有すべきかのコンセンサスがある程度できつつある。一方の日本においては、政府の政策が近年、加害の歴史を議論しなくてすむ方向をはっきりと目指し始めたことによって、アジア隣国間における国際関係も、また国内の世論のコンセンサス形成も、より困難なものとなっている。その結果、日本における加害の歴史に関しては、南京虐殺や従軍慰安婦といったさまざまな過去の事件が、数少ない証拠をめぐる水掛け論に陥る事態となっている。そのため日本では、加害の歴史を糾弾する側から見ると、生き残る人々の証言や被害者の記憶に頼る比重がドイツよりもずっと高く、その傾向は近年ますます強まっている。とはいえ「記憶」というものは、人の最終的なアイデンティティではあるものの、決して絶対ではなく、記憶といえどもあらゆる歴史記述と同様にさまざまな物語化を免れない。こうした記憶と物語をめぐるアポリア⁵¹については、いずれ稿を改めて論

じることとしたい。

悲惨な記憶は容易には語り得ない。少なくとも19世紀において、文化・芸術・美的表象を個人の人生にとって重要な地位にまで引き上げたのが、記念碑文化的に語られるネーションの物語でありナショナリズムであった以上、その延長上にある文学や芸術が、ナショナリズムのもたらした悲惨さきまらないできごとの記憶を語ることは自己矛盾ですらある。その意味で、アウシュヴィッツの後に詩を書くのは確かに野蛮であるのだが、にもかかわらず、語り得ないものをなお語ってゆく僅かな可能性を模索しうるメディアはやはり、パウル・ツェランの文学やヴィクトーア・ウルマンの音楽に代表される文学・芸術以外には他に見当たらない。ネーションの枠が流動化してゆくポスト・ネーション時代を迎えつつある今日、モデルネの体験から一世紀を経た文学や芸術は、ネーションの物語の枠そのものを克服して、より自由な、従ってより語ることの困難な物語をなお語ってゆく可能性を、どのように模索してゆくのであろうか。

【註】

- 1 鹿島徹「物語り論的歴史理解の可能性のために」、雑誌「思想」（岩波書店）2003年10月号（No.954）、S.10.
- 2 上記の「思想」（No.954）の特集「物語り論の拡張に向けて」などを参照。
- 3 Ernest Gerner, *Nations and Nationalism*, Oxford, 1983, S.1（加藤節監訳、『民族とナショナリズム』、岩波書店、2000年、S.1.）
- 4 独語訳はEric. J. Hobsbawm, *Nationen und Nationalismus, Mythos und Realität*, 1991, S.16（邦訳、ホブズボーム、『ナショナリズムの歴史と現在』浜林正夫、嶋田耕也、庄司信訳、大月書店、2001年、S. 6.）
- 5 ibid.
- 6 Hobsbawm, S.19.（邦訳S.10）
- 7 ネーションが単なる「想像の産物」（ベネディクト・アンダーソン）であり、近代になってから「発明」された「虚構」に過ぎないとする構築主義的な考え方は、90年代以降既に定説となりつつあるが、ここではネーションを単に克服されるべき虚妄としてだけでなく「物語」として強い魅力を持つ存在と位置づけることで、なぜ構築主義的な説明の後にもこの物語が高い支持を受け続けているのかの解明へとつなげたい。
- 8 ただし近年では例えば坂本多加雄（『歴史教育を考える』、PHP新書、1998年）のように、ネーションが虚構である点を認めた上で、この虚構が他の虚構よりも優位に立つのだとの主張によってその効能を主張するナショナリストもいる。ナショナリズム批判論者が虚構性の指摘によってナショナリズムを論破しよう

とするのに対抗した新たな戦略と言える。

- 9 Johann Gottlieb Fichte, Reden an die deutsche Nation, in: Immanuel Hermann Fichte (Hg), *Fichtes Werke*, Bd. 7, Berlin, 1971, S.374. 邦訳は、鶴飼哲他編『国民とは何か』（インスクリプト、1997年）所収のフィヒテ、『ドイツ国民に告ぐ』、細身和之・上野成利訳を参照。S.119.
- 10 ドイツにおいてナショナリズムが、当初はジャコバン主義と同一視すらされるような革命思想とみなされており、19世紀前半を通じて反体制思想であったことは、忘れることはできない。
- 11 「誰が物語るのか」というのは、文学研究において語りの理論（Erzähltheorie）が流行した時期に書かれた代表的論文のタイトルである（Wolfgang Kayser, „Wer erzählt den Roman?“, in : *Die Vortragsreise*, Bern, 1958）これは小説における語り手の役割に注目した論文であるが、ネーションや歴史といった物語に関しても同様に「誰が物語るのか」という語り手の役割を問い直す視点がもっと強調されてよい。
- 12 野家啓一は、「物語る」という機能・方法と「物語られた」実体とを区別するために「物語り」と「物語」の区別を提案している（野家啓一、「物語り行為による世界制作」（思想No.954, S.54）ほかを参照）が、ここではその区別は採らず「物語」で統一する。特定のジャンルにのみ当てはまる定義によって物語論の有効性を限定するのではなく、「物語」という共通項を通じてジャンルを超えた思考の枠組みの共通性を抽出することが本稿の目的だからである。なお、ここで「物語」というとき、例えば日本の修正主義者たちが主張するような特定の物語を意味するのではなく、「歴史記述が物語としてしか存在し得ない」という原理的特性を確認しているに過ぎないことは言うまでもない。野家の物語論を批判する高橋哲哉は、その『歴史/修正主義』（岩波書店、2001年）において、歴史修正主義者が「歴史の物語り論」的な国民観に立っているとして野家の物語論を批判しているが、高橋は、自分自身の歴史の見方もまた（いかに良心的な見方であっても）一つの物語でしかないという事態への洞察を欠いている。その結果、（修正主義者たちの）「物語」に対して（被害者たちの）「記憶の継承」が対置されるというねじれた図式ができ上がり、高橋が「記憶」に対して（方法的に問題のある）無批判に高い価値づけを行っている事態へとつながっているように思われる。
- 13 カルロ・ギンズブルク（上村忠男訳）、『歴史を逆なでに読む』、2003年、みすず書房、p.42.
- 14 野家啓一、『物語の哲学——柳田國男と歴史の発見』、岩波書店、1996年、S.12.
- 15 Hobsbawm, S.219f.（邦訳S.246f.）
- 16 三井物産戦略研究所、小村智宏のHP上の発言。それにしても、いずれも数年もたたないうちにセピア色に色褪せて見えるであろうようなつまらない物語ばかりであるが。<http://adv.yomiuri.co.jp/ojo/02number/200411/11keizai.html> 参照。
- 17 小林よしのりはマンガ『戦争論』（幻冬舎、1998年、S.293ff.）で、「この国を想って死を賭ける者に、かつて人々は、国は、物語を用意した。」として、国が物語を用意することの必要性を強調し、自らの物語欲求を正直に告白している。

- 18 Karl Menges, Vom Nationalgeist und seinen „Keimen“, in : Helmut Scheuer (Hg), *Dichter und ihre Nation*, Frankfurt, 1993, S.103.
- 19 Friedrich Schiller, [Deutsche Größe], *Schillers Werke, Nationalausgabe*, Bd.21, Weimar, 1983, S.431.
- 20 Fichte, Reden an die deutsche Nation, a.a.O., S.313.
- 21 *ibid.*, S.359.
- 22 「ドイツ国民に告ぐ」の第4講演の内容。 *ibid.*, S.319.
- 23 記念碑のテーマについては, Thomas Nipperdey, Nationalidee und Nationaldenkmal in Deutschland im 19. Jahrhundert, in : *Historische Zeitschrift*, Bd.206, 1968, S.529ff., 三島憲一, 「芸術による救済の思想」(岩波講座『20世紀の芸術1, 芸術の近代』, 1989年), ゲオルク・L・モッセ, 『大衆の国民化』(柏書房, 1994年)に負うところが大きい。
- 24 Ulrich Hunger, Altdeutsche Studien als Sammeltätigkeiten, in : Jürgen Fohrmann, Wilhelm Voßkamp (Hg), *Wissenschaft und Nation*, München, 1991, S.89
- 25 Ulrich Hunger, Altdeutsche Studien als Sammeltätigkeit, in: *Wissenschaft und Nation*, a.a.O., S.91
- 26 zitiert nach: Heinrich C. Seeba, Nationalbücher. Zur Kanonisierung nationaler Bildungsmuster in der frühen Germanistik, in: *Wissenschaft und Nation*, a.a.O., S.59.
- 27 *ibid.*
- 28 この文脈については足立信彦, 「ドイツ国民文学史記述と歴史の機能」(長沼敏夫編, 『近代ドイツ精神の展開』朝日出版社, 1988年)に詳しい。
- 29 1840年代における Germanistikの成立については, Uwe Meves, Zur Namensgebung ‚Germanist‘, in: Jürgen Fohrmann und Wilhelm Voßkamp, *Wissenschaftsgeschichte der Germanistik im 19. Jahrhundert*, Stuttgart, 1994, S.25ff.を参照のこと。
- 30 堅田剛はこの概念を中核に据えて, 一連のグリム研究を『法の詩学 — グリムの世界』(新曜社, 1985年)にまとめており, グリム兄弟の知的活動の全体像を説得的に提示している。
- 31 メルヒェンの収集・出版は主として弟ヴィルヘルムの仕事であり, 後に引用する初版序文などもヴィルヘルムの筆になるものとされているが, 兄弟の密接な共同作業を考慮すれば, メルヒェンに関しても二人の仕事を区別して議論する必要はないと思われる。
- 32 ヤーコプ・グリムの重要な論文のタイトル。この論文の邦訳は『ドイツ・ロマン派全集第15巻 グリム兄弟』(1989年, 国書刊行会)所収。
- 33 Die Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm in ihrer Urgestalt. Antiqua-Verlag, Lindau. S.7f., 邦訳は, 吉原高志・吉原素子訳『グリム童話集 ①』, 1997年, 白水社, S.17f. (ただし訳文はこの翻訳によっていない。)
- 34 Jacob Grimm, Aufforderung an die gesammten Freunde deutscher Poesie und Geschichte erlassen, zitiert nach: Heinz Rölleke, *Die Märchen der Brüder Grimm*, München/Zürich, 1985, S. 63f. 邦訳は, 小澤俊夫訳『グリム兄弟のメルヒェン』, 岩波書店, 1990年, S.110f. (ただし訳文はこの翻訳によっていない。)

- 35 ibid., S.65.
- 36 Brief vom 1.8.1816. Zitiert nach : Wolfgang Emmerich, *Zur Kritik der Volkstumsideologie*, Frankfurt a.M., 1971, S.34.
- 37 ここではその細部には立ち入らない。7つの版や手稿の間の異同については、たとえば小澤俊夫の一連の検証（『グリムのメルヒェンと現代』（『現代に生きるグリム』, 岩波書店, 1985年）, 『素顔の白雪姫』（光村図書, 1985年）, 『グリム童話を読む』（岩波書店, 1996年）, 『グリム童話考』（講談社, 1999年）, またエリスの『一つよけいなおとぎ話』巻末付録などを参照。
- 38 エリスはこの点についても極めて手厳しい。（John M. Ellis, *One Fairy Story too Many*, 邦訳は池田香代子・薩摩竜郎訳, 『一つよけいなおとぎ話』, 新曜社, 1993年, S.71.）
- 39 小澤俊夫, 「訳者解説」（ハインツ・レレケ著『グリム兄弟のメルヒェン』, 岩波書店, 1990年, S.202, 所収）
- 40 『一つよけいなおとぎ話』, S.94.
- 41 『一つよけいなおとぎ話』, S.55.
- 42 『一つよけいなおとぎ話』, S.168.
- 43 『一つよけいなおとぎ話』, S.43f.
- 44 アヒム・フォン・アルニム, プレンターノ, A. L. グリムらによるグリム童話初版に対する批判の詳細は, 小澤俊夫, 『素顔の白雪姫』, S.83ff.に紹介されている。
- 45 Rölleke, *Die Märchen der Brüder Grimm*, S. 79. 邦訳はS.139に相当。
- 46 小澤俊夫, 『素顔の白雪姫』, S.270.
- 47 Jakob Grimm an Arnim, 31.12.1812.
- 48 Wilhelm Grimm, *Kleinere Schriften*, 1881-87/Reprint 1992, Bd.2, S.10.
- 49 Die Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm in ihrer Urgestalt. Antiqua-Verlag, Lindau. S.1.
- 50 Hobsbawm, S.221. (邦訳S.247)
- 51 例えば高橋哲哉と野家啓一の論争（高橋哲哉『歴史／修正主義』, 岩波書店, 2001年, 中村雄二郎・野家啓一『歴史』, 岩波書店, 2000年）などを参照。